



Title	スーパー・コーディネーター 縁の下の力持ち 井戸武實さん
Author(s)	黒川, 渡
Citation	井戸武實の歩みと追悼集. 2025, p. 19-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100725
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スーパー・コーディネーター 縁の下の力持ち 井戸武實さん

黒川 渡

くろかわ診療所院長

井戸さん、お疲れさまでした。昨年、藤本敬三さんが受診時に訃報を報告してくださいました。その受け止め方は、未だに整理し切れていないというのが正直なところです。

2003年ホームレス支援の医療公衆衛生関係者の取り組みが本格化するなかで、逢坂隆子先生らの肝いりでNPO HEALTH SUPPORT OSAKA（略称NPO HESO）が立ち上げられました。アウトリーチ型の支援を続ける現場兼任の西森琢さんが事務局機能を兼任されていましたが、現場の要請にさらに応えるため、井戸さんが参加されました。その後、事務局の機能の整備と充実のために井戸さんは、強いられた貧困の象徴としての結核という病いに対する熱い思いを抱えながら、軽いフットワークで誰彼いとわざに関係を築き上げて行きました。種々の事情で、事務局の設置場所を検討し、くろかわ診療所の2階を事務局のすまいとしました。その準備には奥様も協力してくださり、その後は困っている人、医療福祉に関わる現場支援を行う人たち、問題に興味や関心を持つ学生などが、彼を求めて集まり、相談やフィールドワークの起点として活躍されていました。多くの人たちが、いろいろな場所に参加できる舞台作りに奔走しておられました。

文字通り西成という地域での社会・医療問題の解決を模索し、活動している人たちのコーディネーターとして域内を走り回っていました。またそれらの記録をきちんと整理する作業は群を抜いており、周囲の厚い信頼を得ていました。笑顔を絶やさず、遅くまで2階で仕事を続けている姿は今も目に焼き付いています。時には毎日診療実務が終わってからいろいろお話をしました。いつも診療所でスタッフを抱えている私を慰労してくださいました。そこにはもっと自分の理想とするものを、より強固な立場に持ち進めていきたいという彼の決意とも羨望とも言える強い思いを感じしていました。

ここから地域を愛し、そのために全身全霊を打ち込みたい、自分自身の歩みを止めてはならないという信念は揺るぎないものでした。あらゆる機会をとらえ、今自分にできることは何か？自分の立ち位置で使える武器はなにか？それはなんであれ、必要とする人には提供するという態度は一貫していました。おそらく、いろいろなところを走り回る毎日は、肉体的にはとても負担であったことは想像に難くありません。

井戸さんが、2023年12月に久々に診療所に訪れたとき、私は彼に芍薬甘草湯を処方していました。井戸さんは、診療所の処置室に来て、驚くべき体の柔軟性をスタッフに笑いながら披露され、毎日時間を見つけては、自宅の階段を何往復もして下半身を鍛えているとおっしゃっていました。おそらくフィールドに若者たちを案内したり、調整作業のため走り回りつづけることができるよう、必死で健康管理をしていたのだと思います。力持ちとの態度を堅持されていました。

私ども診療所に、暴風雨とも言える難問が襲いかかったとき、一度、難波の居酒屋で、診療所の立ち上げから看護師として従事してくれていた江頭真由美看護師（当時は訪問看護師）と二人で私の苦境の中での気持ちを吐露し、やさしく傾聴しながら、慰めて下さいました。救われました。その後も、いろいろ相談に乗っていただいたり、協力していただきました。暴風雨はやがて鎮静しました。そうこうするうちにやがて、NPO HESO の事務局は事実上解散ということになり、井戸さんは天満にある大阪公衆衛生協会の事務局に移行されました。

天満の事務局には、よく伺いました。いつも好物のかりんとう（確か高知県産だったように記憶していますが）をいただきながら、仕事の話やアグレッシブにしておられた SNS での情報発信の状況、ネパールの女性の医学部進学の支援のお話などをうれしそうに話されていました。一時、私も一部関与させていただいたトップ結核パートナーシップに関連する結核勉強会の資料作りなども労をいとわず協力していただきました。忙しい診療実務の中では、なかなか一人ではできない作業でしたが、時間を惜しまず遅くまで一緒に作業をした覚えがあります。

それだけの仕事量をこなし、実績を積み重ねても、彼は決して前には出る人柄ではありませんでした。あくまでも自分を周囲の活動が円滑に進むことができるための、静かな縁の下の力持ちでした。調整・コーディネートするという作業は、周囲への配慮と繊細な心遣いと、実務においては最もエネルギーのいることだと改めて感じています。診療所の 2 階で、大阪府の関連部門から自分を表彰したいと言われているが、自分がそれを受けていいと思いますか？と遠慮がちに私に尋ねてこられました。私は当然のことだと答えました。と同時に、人前に出ようとしない井戸さんの実績をきちんと見ている人たちがいることに感心しました。

私はまだまだ日常診療実務に追われ、ゆっくり回想できる余裕がない中での、乱筆乱文ですが、井戸武實さんの追悼文として以上を述べさせていただきました。